
赦されぬ絆

土師 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赦されぬ絆

【Nコード】

N9218E

【作者名】

土師 玲

【あらすじ】

恋愛なんて人生にはいらない。と明言する悪魔抜いの少女が、とびきり美形の堕天使と事故で魂が融合。その上、幼馴染の美形にも告白されつつ、隠された自身の過去に迫るラブアクション（だと信じてます）！

目覚めの詩・プロローグ

てんぞうのまれい
天造の磨礪

プロローグ

漆黒の瞳に、人々の屍が映る。

無感動に、空からそれを見て、落ちぶれたものと自嘲した。

時はたそがれ時で、夕景の陽ざしに照りつけられた街は、血に染められたように見えた。

「こんなことに、何の意味があるのだ！」

漆黒の髪と翼をもつ、美しい青年が怒りに声を荒げた。

「それを言うな。」

命令なのだ。私たちは従うよりほかはない」

隣に舞う、青年よりやや幼い印象の、やはり黒き翼をもつ少年が告げる。

「いや、それはそうだ。」

しかし、なぜ私たちは主人のためでなく、あれらのために仕事を、しかも、このような汚れ事を引き受けねばならぬのだ」

「それが、あるじの望んだことだから」

少年は、いつそ冷酷ともいえる表情でいった。

「理由くらい、教えてくれてもよいと、考えることすら、罪だと？」
青年はいきどおる。

しかし少年は、嘲笑うように青年を見つめ、
「そうだよ」

と冷たく言うと、翼をひるがえして、飛び去って行った。

それを見送り、彼は悩んだ。

悩んで、ふたたび城のほうへ足を向けた。

そこに、答えがあることを信じた。信じたかった。

この小国は、どうということもない国だ。いままさに、滅ぼされようとしているくらいに、悪逆なことなどしていない。

ただただ、己を守るために全力を尽くすだけの、真面目な国王が治めていた。

その国王には、幼い息子がいる。その子供から親を奪う？ いや、両方殺す。ばかな、この手はそんなことのためにあるのではない。

いや、だが、逆らえないのも事実。

もとの、戻りたくないのも本当だ。

視界に、焼けて崩れ落ち、死屍累々と横たわる兵や、貴族らの死骸が映る。汚い。ひとは死ぬと、なぜ汚いのだ。

そんなことを思いながら、彼は飛ぶ。

やがて、城の中庭だった場所に降り立つと、そこで、悲鳴を聞いた。

「きゃあああつ！」

胡乱な思いで振り向くと、同族たちが、かつては麗しき手で、人々を癒し、救済してきた手が、娘らを髑っっているのが見えた。

彼は、どうしようもない思いを抱いて、立ちすくんだ。

すると、

「こいつ！」

小さくて可愛い声が、足もとから聞こえた。

彼のむき出しの足に、幼い子供が、必死に小さな果物ナイフを突き立てようとしているのが見える。

無駄なことを。

つややかで美しい彼の皮膚は、金属並みに硬くて、強いのだ。

「なにをしている？」

「うわああああ！」

必死で手を上下に振るさまが哀れで、彼はかがみこむと、子どもからナイフを取り上げた。

「よせ、お前が傷つくだけだ」

「黙れ！」

子供は、まだなおもがいていた。

ひどく、身なりがいい。

そうか。

彼は察した。この子供は、王の子なのだな。

こんな、幼い子供すら、殺せ、ということなのか。

「放せ！ 放せよっ！」

こどもは暴れた。小さな手が、彼の体のいたるところにぶつかるが、傷ついていくのは子供の手のほうだった。

「よせ」

彼は止めようとした。その時。

こどもの額が輝いて、紋章が浮かび上がった。

「これは……」

彼は悟った。

あるじの、思惑を。

しかし、その時には、焼け付くような衝撃が全身を襲い、吹き飛

ばされて、宙に舞っていた。

消えるのか……。

ここで。

それもいいだろう。

彼はゆっくりと目を閉じて、落ちゆくにまかせた。

第一章 墮天使の誘惑 【1】

光がたゆたいながら、少女の上をなぞるように流れて消える。

それを見て、シェリイはうつむいていた顔を上げて、微笑んで、振り返った。

「もう大丈夫ですよ」

後ろで固唾をのんでいた男女が、不安がまだ微かに残る表情で、じつとシェリイを見る。

少しして、女性のほうが震えた声で言った。

「本当に……？ 娘は、もう」

「はい。完全に、魔を払い落しました。

しばらくは体力が落ちているので、安静にさせて、少し養生すれば、起き上がれるようになって、元通りに暮らせますよ」

「ありがとうございます」

男性が、眼尻に涙をにじませて言う。

シェリイは首を横に振った。

「いいえ、仕事ですから。謝礼は、教会のほうにお願いいたします」

「はい」

男性は頷いた。

シェリイは、その甘美な瞬間を確かめるように、しばらくそこで寝台に横たわる少女を見つめていたが、やがて、幽かに会釈をする
と、その小さな貧しい家を出た。

仕事は無事に終わった。

今回は派手な立ち回りをするものがない、ごく普通の仕事だった。

「まあ、たまにはいいか」

つぶやく。

シェリイ・スリングは、今年で十六歳になる、小柄で可愛い

少女だ。

濃い色の茶色い髪は、自分で切ったのか、断面だけはまっすぐで、後頭部でひとつに結いあげている。体つきは、一言でいえば発育不良、だが顔だちは愛らしく、大きなハシバミ色の瞳がくりくりと輝いている。

全体的に可愛いのに、なぜか凛々しさが先に来る。

身にまわっているのは、真黒な修道服。

そう、シェリイは修道女だった。ただし、ただの修道女ではなく、悪魔祓いを行うところが違っている。

シェリイは王国教会公認の悪魔祓い師なのである。

周囲の風景が、どこか懐かしさを誘う飴色に染まる。

もうすぐ夕暮れで、暗くなってしまうだろう。

季節は冬なので、もうかなり寒い。シェリイは服の前を寄せて、軽く震えると、村のなかでは最も大きな家へと足を向ける。

そこは村長の家だ。

基本的に、小さな村では、村長宅が宿屋代わりに使われている。中央にある火を焚く居間で、休ませてもらうことができるのだ。

「はあ、おなかすいたな」

シェリイはそうボヤいて、足を急がせた。

「いや、本当に助かりました。

しかし、シスターが悪魔祓いをするのは珍しいですな」

「はい。

よくそう言われます。けれど、私はもともと力が強く、ランドンの司祭様に見込まれ、今の仕事を始めることができました。

これも、神のおぼしめしと思い、日々精進しております」

シェリイはにこやかに答えた。

夕食の席である。

大きな暖炉の前に、使い込まれて角の擦り減った巨大なテーブル

が置かれている。そこに村長の家族が集まり、食事をはじめていた。シェリイは、丁寧にパンをちぎって口に放り込むと、よくかむ。やわらかくて、おいしい。

いつも教会で出されるやたら硬いパンとは大違いだ。というのも、パン種を使っていないせいである。勝手にふくらむのは悪魔の仕業とされ、教会では禁止されているのだ。

シェリイは久しぶりに暖かくておいしい食事に舌鼓を打ちつつ、会話続けた。

「それは素晴らしい。

では、その……もうひとつお願いをしてもよろしいでしょうか？」

「はい？」

「いえね、この村には、百年以上は立つとされる妙なほくらがありまして、そこに悪しきものが封じられているようなのですが、少し前、子供がいたずらで壊してしましまして、それからというもの、先ほどの娘のような者が後を絶たぬのです」

「というと、それが原因ではないかと、村長様は考えていらっしゃるのですね」

「はい。

娘たちを直していただいても、原因がアレにあるのなら、また同じことが起こるかもしれないと、心配しているのです。

是非、調べていただければ、と……ああ、寄進の方ははずませていただきますから」

「分かりました。

すべての禍根を取り除くためにも、調べてみましょう」

「おお、ありがとうございます」

村長は目を閉じて、拝むようにシェリイの手を取って、額につけた。

「いいえ、私は神に仕えるものとして、使命を果たしているだけです」

そう微笑むと、家族らもため息を漏らす。

安堵したのだろう。

シェリイは安心したのか、会話に加わり始めた家族らと談笑しつつ、考えていた。

ほこら、とはなんだろう。

何が封じられているのだろう。

脳裏に、最悪の敵が浮かぶ。

堕天使。

そんなことはないだろう。恐らく、低級より少しランクが上の魔物が封じられているだけだと自分に言い聞かせる。

それでも、与えられた毛布にくるまり、眠る頃になっても、シェリイの不安は、心に大きな染みをつくって、取れることはなかった。

第一章 墮天使の誘惑 【2】

翌朝、村長に案内されて、シェリイはそのほくらとやらに向かった。

霧の立ち込める、実に寒さの染みる朝だ。まだ氷が張るほどではないにしても、寒いものは寒いのだからどうしようもない。

持ってきた分厚い外套を羽織ってきて本当に良かった、とシェリイは思った。

村は、どこにでもあるような一般的なつくりで、集落と畑が分かれて、近くに流れる川には水車小屋と、鍛冶場がある。ほくらは、そんな村の中でも、畑の隅っこにぽつんと立っていた。白い石で作られていて、風雨にさらされたためか、かなり削れている。

形は巨大な石の上に、小さな石碑が突っ立っていて、だれがやっているのか不明だが、花が添えられている。

「あれです」

言われなくてもすぐに分かったが、村長がそう言ったので、シェリイは頷いた。

沈黙が舞い降りて、シェリイは誰にも分らないくらい小さく、眉をひそめた。

誰も動かない。

よほど恐ろしいのだろう。

仕方なく、シェリイはひとり、ほくらに近づく。一步、また一步と近づいて行くことに、邪気のようなものが肌にびびし伝わってくる。

これは……すごい。

はたして、自分などにこのほくらの中に封じられたものを消すこ

となどできるだろうか。

ずっと、すべては努力で贖^{あがな}えると思っていた頃なら別だけれど、今は、自分の実力が、中の上程度であることは痛いほど分かっている。

それでも、父の面影を追って、ずっと戦ってきた。

父は、優れた悪魔被い士だった。

その上、見眼よく人望にも篤いひとだった。

でも、死んだ。

戦いで傷がもとで。彼は最後に、シェリイに言ったのだ。自分たちの故郷を滅ぼした者たちに、負けてはならないと。

だから、シェリイはいま、ここにいる。

すっ、と手をのばして、石に触れる。

後ろから、村人たちのどよめきが起こった。祈りの声も交じっている。なんとかしなければならぬ。彼らの生活に、安定と安心をもたらすことこそ、自分の使命なのだ。

風が突然吹いて、足もとから、赤黒い霧が発生する。

それを見て、シェリイは絶句した。

堕天使！

とてもではないが、かなう相手ではない。

一旦本部に戻って、グライナス師クラスの人間を連れてこなければ、到底。

「……くっ、あっ！」

霧が皮膚に触れて、びりびりとした電撃を放つ。

村人たちのほうを見やると、まるでそのような眼差しがシェリイを貫く。

どうして、私にはこの程度の力しかないのだろうか？

そう思うと、するり、と甘くて低い声が脳裏に滑り込んできた。

『ならば、我と契約を結べ』

「嫌だ」

『力なら、ここにある。忌まわしくとも、強い力だ。代わりに、お前の魂を差し出せば、一生の間、力を貸してやろう』

「断る」

『強情もいつまでもつかない？ 我にとっては、お前など虫けらと同じなのだぞ』

「うるさいっ」

シェリイは、抵抗の言葉を叫びつつも、少しずつ意識が浸食されているのに気づいていた。まずい、このままでは、飲まれる！

そう、思った時だった。

額が熱い。どうしようもなく、熱くて、シェリイは叫び声をあげた。

「ああああああっ！」

『これは……メルヴァリエのっ！ ぐうっ！』

声が苦しんでいるのが聞こえる。

シェリイの額から、青白い輝きがあふれて、赤黒い霧とからみあう。

そして……。

ほこらが爆発した。

瞬間、声の魂と、シェリイの魂が砕け散り、周囲を漂っていた光と霧がそれらをからめとって、ひとつにまとめた。

そうして、シェリイは気を失って、倒れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218e/>

赦されぬ絆

2010年10月10日00時59分発行